

寺田寅彦

田丸先生の追憶





# 田丸先生の追憶



なくなつてまもない人の追憶を書くのはいろいろの意味で困難なものである。第一には、時のパースペクティヴとでもいうのか、近いほうの事がらの印象が遠い以前のそれを掩散えんさんしたがる傾向がある。第二には、近いほうの事を書こうとすると自然現在の環境の中でのいろいろの当たりさわりが生じやすい。第三には、いったいそういうものを書こうというような気持ちにもなりにくいものである、いかにも心ないわざだという気がするのであ

る。それで田丸先生たまるの場合にしても、なくなられてまもない今日、こんなものを書く気になりかねるのではあるが、理学部会編集委員のたつての勧誘によって、ほんの少しばかり自分の高等学校時代の思い出を主にして書いてみることにした。

明治二十九年の秋熊本高等学校に入学してすぐに教わった三角トリゴノメトリー術の先生がすなわち当時の若い田丸先生であった。トドハンターの本を教科書として使っていた。いちばん最初に試験をしたときの問題が、別にむつかしいはずはなかったのであるが、中学校の三角の問題のよう

な、公式へはめればすぐできる種類のものではなくて、「吟味」といったような少しねつい種類の問題であったので、みんなすっかり面食らって、きれいに失敗してしまって、ほとんどだれも満足にできたものはなかった。その次の時間に先生が教壇に現われて、この悲しむべき事実を報告されたのであったが、その時の先生は実にかっかりしたような困り切ったような悲痛な顔をしておられた。あんなやさしい問題ができないのは実に不思議だと言われているのであった。生徒一同もすっかりしよげてしまい恐縮してしまったのであったが、とにかくもう一ぺん試験の

やり直しをすることになり、今度は普通の中学校式の問題であったから、みんなどうにか及第点をとって、それで事は落着いたのであった。

たしか二年のときであったと思うが、ある日、運動会のある翌日だからというので、先生がたに交渉して休みにしてもらおうとした。ほかの先生はだいたい休みとということになったが、物理の受け持ちの田丸先生はなかなか容易に承諾を与えられなかった。そこで生徒のほうで勝手に休むことに相談一決してみんなで失敬してしまつたものである。先生が教場へはいつてみるとそこには



たった一人、まじめで勉強家で有名な何某一人のほかにはだれもいなかった。その翌日になると一同で物理の講堂へ呼び出されて、当然の譴責けんせきを受けなければならなかった。その時の先生の悲痛な真剣な顔を今でもありあり思い出すことができるような気がする。それが生徒に腹を立ててどなりつけるのではなくて、いったいどうして生徒がそういう不都合をあえてするかということに関する反省と自責を基調とする合理的な訓戒であったのだから、元来始めから悪いにきまっている生徒らは、針でさされた風船玉のように小さくなってしまった。化学のK

先生がそばにいて取り成しの役を勤められたのにお任せしてとにかく一同で謝罪と謹慎の意を表してゆるしてもらうことになったのである。

われわれの在学中田丸先生はほとんど一度も欠勤されなかつたような気がする。当時一方には、日曜の翌日、すなわち月曜日というと三度に一度は必ず欠勤するということ。先生もいたので、田丸先生の精勤はかなり有名であつた。

ある時熊本の町を散歩している先生の姿を見かけた記憶がある。なんでも袖の短い綿服にもめん袴ばかまをはいて、  
朴齒ほおばの下駄、握り太のステツキといったようないで立ち

で、言わば明治初年のいわゆる「書生」のような格好をしておられた。そうして妙な頭巾ずきんのような風変わりの帽子をかぶっておられたような気がする。とにかく他の先生がたに比べてよほど書生っぽい質素で無骨な様子をしておられたことはたしかである。

まじめで、正直で、親切で、それで頭が非常によくて講義が明快だから評判の悪いはずはなかった。しかし茶目気分横溢おういつしていてむつかしい学科はなんでもきらいだという悪太郎どもにとっては、先生の勤勉と、正確というよりも先生の教える学問のむつかしさが少なからず煙

たくもあつたらしい。当時、アメリカの民謡の曲を取つた「ヒラく」と連隊旗」という唱歌があつたが、それを、もう一ぺんもじつてこしらえたパロディーの戯歌がはやつていた。その歌詞の中には、先生の名も他の多くの先生がたと一度に槍玉やりだまにあげられていた。そうして「いざあばれ、あばあれ」というのがこの愉快的歌のリフレインになつていたのである。

第二学年の学年試験の終わったあとで、その時代にはほとんど常習となつていたように、試験をしくじつた同郷同窓のために、先生がたの私宅へ押しかけて「点をも

らう」ための運動委員が選ばれた時、自分もその一員に  
されてしまった。そうしてそのためにもう一人の委員と  
連れ立って始めて田丸先生の下宿を尋ねた。当時先生の  
宿は西子飼橋にしこがいはしという橋の近くで、前記の化学のK先生と  
同宿しておられた。厳格な先生のところへ、そういう不  
届き千万な要求を持ち込むのだから心細い。しかられる  
覚悟をきめて勇気をふるって出かけて行っただが、先生は  
存外にこうしたわれわれの勝手な申しぶんをとにかくも  
聞き取られた。しかもちろんそんなことを問題にはさ  
れるはずがなかった。その要件の話がすんだあとで、い

ろいろ雑談をしているうちに、どういうきっかけであったか、先生が次の間からヴァイオリンを持ち出して来られた。まずその物理的機構について説明された後に、デモンストレーションのために「君が代」を一ぺんひいて聞かされた。田舎者の自分は、その時生まれて始めてヴァイオリンという楽器を実見し、始めて、その特殊な音色を聞いたのであった。これは物理教室所蔵の教授用標本としての楽器であったのである。それから自分は、全く子供のように急にこの珍しい楽器のおもちやがほしくなったものである。そうして月々十一円ずつ郷里からも

らっている学費のうちからひどい工面くめんをして定価九円の  
ヴァイオリンを買うに至るまでのいきさつがあつたので  
あるが、これは先生に関係のない余談であるからここ  
は略する。とにかく自分がこの楽器をいじるようになっ  
たそもそもその動機は田丸先生に「点をもらい」に行つた  
日に発生したのである。ずっと後に先生が留学から帰つ  
て東京に住まわれるようになってから、ある時期の間は、  
ずいぶん頻繁に先生のお宅へ押しかけて行って先生のピ  
アノの伴奏で自己流の演奏、しかもファースト・ポジシ  
ョンばかりの名曲弾奏を試みたのであつたが、これには

上記のような古い因縁があったのである。

高等学校における田丸先生の物理も実に理想的の名講義であったと思う。後に理科大学物理学科の課目として教わったものが「物理学」だとすると、その基礎になるべき「物理そのもの」とでもいったようなものを、高等学校在学中に田丸先生からみっしり教わったというような気がする。この時に教わったものが、今日に至るまで実に頭にしみ込み実によく役に立ち、そうしていつでも自分の中で生きてはたらいっているのを感じる。高等学校の物理は実にだいじだと思う。



そのころ先生は時々物理の宿題を出して生徒一同から答案を徴し、そうしてそれを詳しく調べた上で一同を集めておいてその答案に対する丁寧な講評をされた。その宿題を解くのが自分には実に楽しみであつた。いつか「月蝕げつしよくのときに、地球の半陰影ペナンプブラが見えないのはなぜか」という問題が出た時、いろいろ考えたがよくわからず、結局何かだいたい無理なこじつけを書いて出した。さて、その講評の日に、順次に他の問題について説明された後に、この半陰影の問題に移った。「諸君の中にこういうことを書いた人がある」と言つて、自分の提出した答案

の所説を述べ、「これは、なかなかうまい説明であると思う。が」と言つてちらりと自分のほうを見ながら、ここにこして「しかし、惜しい事には……」と言つてその似而非説明えせの大きなごまかしの穴を指摘しておいて、さて、丁寧に先生の本物の説明を展開するのであった。自分はずっかり赤面し恐縮してしまった。三十余年後の今日でもはつきりその時の事を覚えていくくらい恥ずかしかつたのである。先生もなかなか人の悪いところがあつたという気がする。もつとも相手はやつと二十歳の子供であつたのだから、ちよつとからかつてみる気にもなら

れたものである。

先生に三角を教わり力学を教わったために、始めて数学というものがおもしろいものだとということが少しばかりわかって来た。中学で教わった数学は、三角でも代数でも、いったいどこがおもしろいのかちつともわからなかったが、田丸先生に教わってみると中学で習ったものとはまるでちがったもののように思われて来た。先生に言わせると、数学ほど簡単明瞭なものはなく、だれでも正直に正当にやりさえすれば、必ずできるにきまつているものだといっているのである。教科書の問題を解くのも、

おみくじかなんかを引くように、できるもできないのも運次第のものででもあるかのように思っていた自分のような生徒たちには、先生のこの説は実に驚くべき天啓であり福音であった。なるほど少なくとも書物にあるほどの問題なら、その書物で教えられた筋道どおり正直にやれば必ずできるのであった。そういうことを発見して驚いたものである。

自分は中学五年時代には将来物理をやりたいと思ってひとりできめていた。中学校の先生の中には、ぜひ心理学をやれとすすめる先生もあった。しかし父がいろいろ

の理由から工科をやることを主張したので、そのころ前途有望とされていた造船学をやることになり、自分もそのつもりになって高等学校へはいった。ネーヴアル・アンニユアルなどを取り寄せていろいろな軍艦の型を覚えたり、水雷艇や魚形水雷の構造を研究したりしていたのであるが、一方ではどうにも製図というものにさっぱり興味がなくて、また一方では田丸先生の物理の講義を聞き、実験を見せられたりしていると、どうしても性に合わぬ造船などよりも、物理のほかに自分のやる学問はないという気がして来た。それでとうとう田丸先生に相

談を持ち掛けたところが、先生も、それなら物理をやったほうがよかろうと賛成の意を表してくださった。少なくも、そういうふうにしてその時の先生の話を了解したので、急に優勢な援兵を得たように勇気を増して、夏休みに帰省した時にとうとう父を説き伏せ、そうして三年生になると同時に理科に鞍くらがえをしたのである。それがために後日できそこないの汽船をこしらえて恥をかくであろうことの厄運やくうんを免れた代わりに、将来下手な物理をこね回しては物笑いの種をまくべき運命がその時に確定してしまったわけである。しかし先生にその責任をもって行く

わけでは毛頭ない。それどころか、造船をやらずに物理をやったことを後悔したことは三十余年の間に一度もなかったのである。

自分が高等学校を出た後まもなく先生は京都大学、ついで東京大学に移られ、それから留学に出かけられた。帰朝後いよいよ東京へ落ち着かれたころは、西片町へんにしばらくおられて、それから曙町へ生涯の住居を定められた。自分はそのころ小石川原町にいて曙町には近いものだから、時々ヴァイオリンをさげて行っては先生のピアノのお相手をした。そのヴァイオリンはもはや昔の

九円ではなかったのである。先生はよくシューベルトの歌曲を歌って聞かせられたが、お得意のレペルトアルは、*Ständchen, Am Meer, Im Dorfe, Doppelgänger, Erlkönig, Leiermann, Lindenbaum etc.* であった。それから *Reissiger* の *Zwei Grenadier* とか *Die Uhr* などもよく歌われたものである。いつかのニュートン祭にやはりこの「エルケーニヒ」か何か歌われたことがあると思うが、そういうときでも先生は、「要するに、やるという事がハウプトザツヘだから……」と言って、決して巧拙のできばえなどは問題にされなかった。



酒も煙草たばこも甘いものもいっさいの官能的享樂を顧みなかつた先生は、謡曲でも西洋音楽でも決してそれがただの享樂のためではなくて、やることが善よいことだからやるのだというように見えた。休日きゅうじつに近郊きんこうなどへ散歩さんぽに出かけられるのでも、やはり同様な見地けんちからであつたように自分には思われる。

下手な論文を書いて見ていただくと、実に綿密めんみつに英語の訂正はもちろん、内容の枝葉えだの点てんに至るまで徹底的に修正されるのであつた。一度鉛筆で直したのを、あとで、インキでちゃんと書き入れて、そうして最後に消しゴム

ですっかり鉛筆を消し取って、そのちりを払うことまで先生がやられるので、こっちではかえってすっかり恐縮してしまって、「私やりますから」と言っても、平気ですみからすみまで手を入れ、おしまいまで自身の手できれいにやってしまわないと気がすまないというふうであった。そういう時にいつも言われた「とにかく、ちゃんとしておかなくちゃ」という先生の言葉は、いろいろの場合にいつもよく聞かされ耳の奥にしみ込んで忘れられないものである。いかなる事からでも「ちゃんとして」おかなければ決して済まされなかつた。残らずさし合わ

せた釘一本のわずかなゆるみでも決して見のがし捨ててはおかれなかったのである。

先生のノートや原稿を見るときれいな細字で紙面のすみからすみまでぎっしり詰まっっていて、「余白」というものがほとんどなかったようである。

しかし先生は、「むだ」や「余白」だらけのだらしない弟子たちに対して、真の慈父のような寛容をもって臨み、そうしてどこまでも懇切にめんどろを見てやるのに少しも骨身を惜しまれなかったように見える。自分が見えなかった、人には正確を要求する十人並みの人間

のすることとは全く反対であったのである。

先生が、もう少し少しだらしのない凡人であってくれたら、そうしたらおそらくもう少し長生きをされて、そうしてもう少し長く後進のためにもめんどうを見てくださることができ、また先生としてももう少しのどかな生涯を送られたのではないかという気がすることもある。しかしそれは結局だらしのない人間の言うことで、先生は先生としての最も意義ある最も充実した生涯を完成されたのであろう。

こうして書き出してみると、先生の思い出はあとから

あとから数限りもなく出て来るのであるが、この機会にはやはりこれくらいにして筆をおいたほうが適當であろうと思う。

記憶違いのために事実相違の点もいろいろあるかもしれない。それについては読者の寛容を願いたいと思う。先生がかりに再生されて、この追憶を読まれたら、と想像してみる。先生はやっぱりここにこして、何か一言ぐらい鋭いリマークをされて、そうして、それきりでゆるしてくださるであろうという気がするのである。

(昭和七年十二月、理学部会誌)



日本文学電子図書館

---

## 田丸先生の追憶

著 者 寺田寅彦

作成者 宮澤一郎

底 本 寺田寅彦随筆集 第三卷  
岩波文庫、岩波書店

1991年4月5日 第55刷発行

---



日本文学電子図書館